



本日は晴天なり

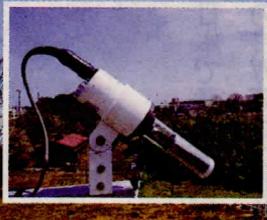
る。雲量とは全天を10とした時の雲の占める割合で、観測者が空を仰いで頭の中で雲の合計を見積もる。ちなみに快晴は1以下、曇りは9以上である。晴れにもかなり幅があり、晴れと言われても、人によって感じ方や受け取り方に差があろう。高い雲、低い雲、ちぎれ雲、流れ雲、古来「雲をつかむ」のは難しい。

一方、気象庁は「アメダス」の「日照計」で晴れ具合を自動的に観測している。日照の強さは雲の厚さや動きによって変化するが、1平方センチあたり120℞以上あれば「日照あり」と定義している。ちなみに快晴時は約1000℞である。毎時間の日照時間の積算値(分単位)が公表されている。

明日からいよいよ6月、何度も晴れに恵まれた5月も、やがて梅雨空へと季節は進む。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

日照計(鹿嶋アメダス)



「本日は晴天なり、ただいまマイクの試験中…」。

運動会などで時々耳にする言葉だ。実はこの文言、無線局がテストを行う時、必ず冒頭に放送される言葉の借用であり、現在でも電波法で義務付けられている。たとえ雨が降っていても必ず「本日は晴天なり」である。

ところで、晴れるか曇るか、雨かは気になるが、雲の種類や高さ、広がりの実況は天気予報作業にとっても基本的に重要な情報である。観測・通報方法は国際的に統一されており、「晴れ」は「雲量が2以上8以下」と定義されてい



風船爆弾

のデータが不可欠である。観測には「ラジオゾンデ」が用いられている。水素ガスが満たされたゴム製の気球は、無線機を搭載し、各種センサーを吊り下げて、風船爆弾と異なって膨らみながら、約30^キ上空まで約90分で上昇する。従来、風の観測は気球をアンテナで自動的に時々刻々追跡し、軌跡から求めていたが、最近ではGPSを利用した「GPSゾンデ」に変わりつつあり、全自動化も進んでいる。日本では16カ所、全世界で約900カ所、12時間おきに世界一斉に行われる。

つくば市にある高層気象台は、その一つで国際的地点番号「47772」と識別されている。気球は最後に破裂して落下しパラシュートが開く。このゾンデは使いきりで1回の飛揚には数万円を要するが、「ひまわり衛星」とともに、上空の気象要素のかけがえのない観測手段である。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

高層気象台でのゾンデの飛揚(気象庁提供)



太平洋戦争の末期、爆弾をつるした気球が茨城県の大津海岸などから米国に向けて放球された。いわゆる「風船爆弾」である。飛揚数は約9000個といわれ、高度約10^キの偏西風に乗って太平洋を漂流し、かなりの数が西部に到達した。何層もの和紙をコンニャク糊で張り合わせ、表面に柿渋が塗られて水素ガスが漏れないようになっていた。途中のガス漏れによる浮力の低下には時計仕掛けで砂袋が切り離された。

毎日の天気予報や週間予報、台風進路予報などには、地球規模で上空の気圧、気温や湿度、風